

木都から洋上風力発電のまち經由・水素社会実現へ 地域資源・財産の活用で目指す市民との幸福共創!!

「多彩なまちづくり事業の要は 「エネルギーのまちづくり」

秋田県北西部に位置する能代市は、平成18（2006）年3月21日、旧能代市（昭和15／1940年に市制施行）および旧二ツ



1000年以上前、坂上田村麻呂が蝦夷討伐の際に灯籠を川に流し威嚇したとの伝説など諸説ある「ねぶながし」（能代役七夕）は、能代の夏の美しい風物詩だ

井町の合併により、新生能代市としての歩みを開始した。

旧能代市は、江戸時代に北前船の寄港地として栄えた能代港を軸にまちづくりが進められてきた。特に近代以降は漁業および物資の集散地、商業地としての性格を併せ持ちながら、周辺町村との合併を繰り返し、近代的な市街地を形成してきた。

一方の旧二ツ井町は、近世以降、日本三大美林・秋田杉のまちとして知られている。町面積の約8割を山林が占め、北に白神山地に連なるブナ原生林、南には秋田県を代表する天然秋田杉の美林が広がる。

この対照的な特色を持つ両地を古来つないできたのが、東北地方を代表する大河・米代川だ。

特に近代までの二ツ井町で生産された秋田杉の木材などは、主に米代川を使って筏で能代港まで運ばれ、能代周辺で消費される分以外は陸路・海路で各地方に運ばれた。

さいとうしげのぶ
齊藤滋宣
能代市長



また、米代川

水系の豊かな伏流水に恵まれた、両地区にまたがる平野部は、あきた白神米や白神ねぎ、白神山などのブランド農産物の産地として近年知られている。

母なる大河・米代川の強い絆で結ばれ、共存共栄してきた両地が合併したのも、必然といえるだろう。

そして合併の結果、能代市の面積は426・95km²に拡大（旧能代市245・55km²／旧二ツ井町181・40km²）。合併前年の国勢調査（平成17／2005年）で総計

6万2858人だったエリアの人口は、本年5月末時点で4万7710人となっている。

全国の地方都市と同様、少子高齢化と人口減少の渦中にある能代市だが、県都・秋田市の中心部から70km圏内に位置する地理的条件や、複合的な産業構造を持つことなどから、県内では秋田市に次ぐ財政力指数となっており、秋田県北部の中核的な都市に位置付けられている。

その原動力となっている要素の一つが、物流拠点としての力の源泉ともなる、恵まれた交通環境だ。市内を国道7号や101号などの幹線道路が縦横に走っており、高規格幹線道路・日本海沿岸東北自動車道（新潟県から日本海沿岸を秋田県まで北上、東北縦貫自動車道と連結して青森県に至る）

が現在、二ツ井白神ICまで整備済みで、令和8（2026）年度中には全線開通の見込みだ。二ツ井今泉道路（二ツ井町と北秋田市を結ぶ高規格幹線道路）も近々開通の見込み（令和5／2023年度中の開通予定が令



毎年5月に能代科学技術高校（旧能代工業高校）バスケット部を軸に開催される「能代カップ」は、全国の高校バスケット部の憧れの大会だ



中心市街地の商店街に設置された「能代バスケットミュージアム」は全国から来訪するバスケットファンの交流の場でもある



和4／2022年8月豪雨の被災で延期中)で、能代市周辺エリアはこれから先、より一層良好な交通環境に恵まれることが、確実に視されている。

このように人文地理学的に見ても優れた数々の環境的特徴を、多様な形で備える能代市は、恵まれた地域資源・財産を活用した多彩かつ特色のある各種まちづくり施策・事業を展開している。

「バスケットの街づくり」「宇宙のまちづくり」「恋文のまちづくり」「エネルギーのまちづくり」などのユニークな施策・事業群だ。このうち「バスケットの街づくり」は、高校バスケット部で全国制覇58回の実績を誇る能代工業高校（現能代科学技術高校）バスケット部を軸とする、地域発信事業だ。全国の高校バスケット部が一度は出てみたいと憧れる「能代カップ」（毎年5月、本年度で37回目）や、年間を通じてファンが全国から訪れる《能代バスケットミュージアム》（旧能代工業高校バスケット部関連の展示、Bリーグなどバスケット全般の情報発信基地としても機能）の存在は、《バスケットの街・能代市》のシンボルだ。

「宇宙のまちづくり」では、市内に立地するJAXA能代ロケット実験場の存在を軸に、多彩な発信事業やイベントを実施するほか、JAXAの研究施設が立地する全国5市2町で構成される《銀河連邦》主催の交流事業などを通じ、宇宙へのロマンを発信している。

「恋文のまちづくり」は、桜やツツジ、紅葉の名所であり、デートスポット・パワースポットとしても有名な「きみまち阪立自然公園」を軸に、市と二ツ井町商工会が中心となり、実施されている情報発信事業だ。



秋田杉をふんだんに使って大人気の「道の駅ふたつ」。愛称は「きみまの里」



恋文のまちづくりを実施する二ツ井地域の観光案内・交流拠点「恋文すぽっと きみまち」(ピンクの軽トラは恋文すぽっとのシンボル)



秋田杉の美林に覆われる緑の山々(米代川沿岸「きみまち阪」上空からのアングル)

「きみまち阪」は米代川が大きく蛇行する様子を目の当たりにできる高台にある。同地には明治天皇(明治14年東北御巡幸)、近世の大旅行家・菅江真澄、英国人旅行家 イザベラ・バード(明治時代初期に東北地方縦断)など多彩な偉人・著名人が訪れては、その絶景ぶりを称賛してきた。

ちなみに、明治14年東北御巡幸の際、長旅を気遣う皇后からの手紙が、この地で天皇の到着を待っていたことから、明治天皇が《きみまち阪》と命名したとされる。この伝承に基づき、旧

二ツ井町が平成6(1994)年〜平成15(2003)年まで実施した「きみまち恋文全国コンテスト」を契機に、現在も「恋文のまち」が二ツ井地域の活性化のキャッチフレーズとなっている。

こうした多様な地域資源・財産に基づくまちづくり施策・事業の中でも、近年、世界が連携・協働して達成を目指す「脱炭素社会実現」への取り組みの一環として、ひととき注目を集めているのが、「洋上風力発電」や「水素エネルギー」など、環境負荷の小さい次世代エネルギーを軸とする「エネルギーのまちづくり」だ。

「日本で初めての《洋上風力の大規模商業運転》(秋田港・能代港洋上風力発電所)が令和4年に開始されました。これまでの能代市の取り組みは、今、各方面から洋上風力発電のフロントランナーにふさわしいとの評を頂いております。

実際、洋上風力発電は、2050年を目標とするカーボンニュートラルを実現に導くための切り札とされていますが、日本海から吹き付けてくる風を活用した洋上風力発電と共に、まさに『時代の風』が能代市の追い風として吹いてきつつある。そんな《実感》を、私たちはひしひしと感じております

充実感に満ちた口調でそう語るのには、齊藤滋宣能代市長だ。齊藤市長の出身地は、実は能代市でなく北海道だが、学生

時代から能代市出身の国会議員の秘書を経験したことを契機に、合併前の二ツ井町を地盤に平成3(1991)年から県議を2期、平成10(1998)年から参議院議員を1期務めた。平成18(2006)年4月には、冒頭に述べた新設合併に伴う能代市長選に出馬し、当選。本年で5期19年目を迎えている。

次世代エネルギーのフロントランナー・能代市ができるまで

若き日に、偶然の巡り合わせで能代市との地縁が生まれた齊藤市長は、「21世紀が幕開けた平成13(2001)年に、24基の風車を持つ能代風力発電所(現新能代風力発電所)が運転開始したのを皮切りに、太陽光発電やバイオマス発電など、さまざまな再生可能エネルギーの導入が進み始めた能代市の取り組みに対し、県議時代から大きな可能性を感じ取っていた」とも語る。

「県都・秋田市からは比較的近いものの、能代市は東北地方最大の消費都市・仙台市まで公共交通を使って約4時間、東京首都圏までは約5時間かかります。秋田県エリアでは交通至便な環境でも、大消費地とは離れている。そのため、米代川流域の上質な秋田杉の集積地としてかつて東洋一の木都とされたほどの木材産業は、次世代の担い手不足などもあり、規模が年々縮小して

能代市

市 政 ル ポ

(秋田県)



あきた白神米・白神山うどと並ぶ能代市のブランド農産物の代表・白神ねぎの最大の特徴は強い甘み、太くて柔らかいシャキシャキの食感だ

日本海から吹き付ける強風は、能代市にとって実在厄介な存在だった。能代市の海岸線には、江戸時代から植林が行われてきた、

いるのが実情です。しかし、木都能代にとつての木材産業はシンボルであり、国内の製材大手企業を誘致したり、ICT技術を活用した独自の森林経営管理事業(能代システム)を考案するなど、伝統的な地場産業振興の努力は今も懸命に続けています。また、農業においても《白神ねぎ》を中心に、高付加価値の《戦略作物》の生産拡大を図るなど、より魅力的な農業の振興を図っております。その一方で、既存の地場産業を維持・振興するだけでは、人口減少に付随して税収も減少していく現状からの脱却を図るのは難しい。同時に、ますます厳しくなる都市間・地域間競争に勝ち、新たな成長の基盤を構築するには、『能代市ならではの』とされるような取り組みを打ち出す必要があります。そこで改めて着目したのが、日本海から吹き付ける『強風』だったのです」

洋上風力発電の推進は、それに資する重要な原動力であり、停滞気味だった能代市の伸び代を拡大する《追い風》になる可能性を、大いに秘めています」



防風林の中に設置された「風の松原風力発電所」の風車。事業費の一部を市民ファンドで調達



日本初の洋上風力の大規模商業運転、全20基が稼働中の秋田港・能代港洋上風力発電所

東西約1km・南北約14kmに及ぶ、総計700万本の防風林《風の松原》(日本五大松林)がある。それは実に見事な松林だ。半面、そのように大規模な防風林を数百年間にわたって形成し、維持しなければならぬほど、特に冬の日本海から吹き付けてくる冷たい季節風は厳しかった。飛び砂などの及ぼす被害も、尋常ではなかった。『洋上風力発電という新たな技術が、厄介者の《風》を今、能代市ならではの地域資源・財産・追い風へと変化させつつあります。持続可能な郷土を構築するには、若い人たちが住みたいと思えるような、良質な雇用を生み出し、市民の所得水準を上げるとともに、市民生活の質を高めることに尽力していかなければなりません。』

「エネルギー問題」への対応に向け、自然エネルギーや未利用エネルギーなどの活用の施策展開の指針として、平成15年2月に「能代市新エネルギービジョン」を策定し、取り組みを進めてきた。平成18年の新市発足および齊藤市長の就任を機に、再生可能エネルギーの導入に向けた、そうした取り組みは一気に加速していく。平成25(2013)年3月には能代市における再生可能エネルギーの導入、付随する産業振興などに関する施策・事業の方向性を示す「能代市再生可能エネルギービジョン」が策定され、能代市の将来像は「エネルギーで活力をつくり、エネルギーを自給できる『エネルギーのまち』と定められた(※

平成31年3月には改訂版となる「能代市次世代エネルギービジョン」を策定。

平成28年には、能代市も出資・参画する《風の松原風力発電所》が運転を開始（風力発電の風車17基）。資本の大部分が地元企業と能代市によって構成されるという、全国的にもまれな事業モデルとして注目を集めた。さらに、同時に募集した同事業への市民ファンドに、総計7250口もの応募が得られるなど、市民、事業者の主体的な参画と行政との協働が実践された事業となった。

令和4年には、前出、日本初の《洋上風力の大規模商業運転》が開始されるとともに、齊藤市長は「再エネ海域利用法」に基づく促進区域に指定されている6市2町の首長を



エネルギーのまちづくりに関連する啓発事業「次世代エネルギーフェスティバルin 能代」と「能代次世代エネルギースクール」

発起人として発足した「全国洋上風力発電市町村連絡協議会」の初代会長にも就任する。それ以後、能代市には各方面から、名実共に「洋上風力発電のフロントランナー」との評が寄せられることになった。

洋上風力発電推進の向こう側に 見据える水素社会実現への夢

前夜から曇りがちで、降雨の心配もあったが、取材当日（本年4月24日）の朝の段階では、臨海部に立地するJAXA能代ロケット実験場の正面の海上に林立する洋上風力発電所の風車（20基）は、雲間から差し込む陽光に文字通り、光り輝いていた。

海に面したJAXA能代ロケット実験場の

隣接地には「新能代風力発電所」（旧能代風力発電所）の7基の風車が設置されている。その背後には、東西約1km・南北約14km、総計700万本の防風林《風の松原》があり、松林の樹上にはズラリと等間隔に並んだ「風の松原風力発電所」の風車が計17基、頭を出しているのが見える。
海上から吹き付けて



旧料亭「金勇」（国登録有形文化財／昭和12年築）は木部能代を象徴する建物。県内屈指の料亭として宴会・接待・結婚式などに活用されたが、現在は能代市の観光交流施設

くる風が、陸・海合わせて44基の風車のブレードを一齐に回転させている様子は、まさに圧巻の迫力だった。

また、新能代風力発電所の風車や洋上風力発電所の風車が形成する「風力発電の林」の向こう側には、平成5（1993）年に運転開始し、令和2年には3号機が稼働した「能代火力発電所」も遠望される。

JAXA能代ロケット実験場の宇宙的な環境に身を置きながら、目の当たりにするそれらダイナミックな近未来的風景は、まさに「宇宙のまちづくり」「エネルギーのまちづくり」を推進する能代市のエッセンスが、

能代市

(秋田県)

市 政 ル ポ

一つに凝縮されたような感覚のする景観だった。

「洋上風力発電に関しては現在、多角的な事業計画が同時進行中です。例えば、本市沖の促進区域である《能代市、三種町及び男鹿市沖》と《八峰町及び能代市沖》において、既に事業者が選定され、令和10(2028)年と令和11(2029)年の運転開始に向け、それぞれ事業が進められております。また、日本海側のその他の区域においても事業者が選定されてきており、今後順次、建設工事が進むものと思われれます。

能代港沖を中心に、北陸から北海道にかけての海域はこれから近未来に向けて、まさに《洋上風力発電銀座》とでもいえるような活況が訪れることが、予測されているのです。

そうした状況下において、日本初の洋上風力発電事業として、秋田港・能代港洋上風力発電所が令和4年から稼働している能代市が、世評通りに《洋上風力発電のフロントランナー》としての役割を果たしているのは、まさにこれから本番と考えておられます。

さらに、それに付随する《水素社会実現》への取り組みも、JAXA能代ロケット実験場のご協力を得て、既に始まっています。

JAXA能代ロケット実験場を見学させていただいた際に、ひととき目立つ縦長の大きなタンクがあった。液化水素タンクだ。

JAXA能代ロケット実験場では現在、燃焼実験をはじめ、水素エネルギーに関する各種実験を実施中だ。「宇宙のまちづくり」の軸になっているJAXA能代ロケット実験場が立地していることの利点は、ここでも大きな効果を持っている。

「そのように、脱炭素社会に不可欠な洋上風力発電や、水素社会への取り組みを推進していくことは、当然、さまざまな波及効果をも生み出すはずです。他の地域よりも一足早く取り組みを開始したフロントランナーの能代市としては、近い将来、風力発電の関連産業の集積を図って、事業の推進に必要なメンテナンスや機材生産などの技術の蓄積、産業化なども総合的に図っていきたいですね。

そして、雇用の場の拡大や、税収の安

定化と増大化、市民の生活の質の向上などにも役立てていき、若者たちが暮らしてみたい、子育てしてみたいと心から思ってもらえるようなまちづくりを進めていきたい。そのように考えております」

洋上風力発電や水素社会実現の取り組みは、能代市においてはもはや近未来計画などではない。リアルで現実的な取り組みとして、既に進行中なのだ。

(取材・文〓遠藤隆／取材日〓令和6年4月24日)



JAXA能代ロケット実験場に設置された液化水素タンク。液体水素はロケットの燃料に使われており、実験場で燃焼実験などが行われている



JAXA能代ロケット実験場で実施される固体ロケットモータ・地上燃焼実験の様相：©JAXA



ロケット打ち上げおよび自律ロボット制御の大会などのほか、宇宙にまつわるさまざまな体験イベントが行われる「能代宇宙イベント」(毎年8月)